

学校と塾の関係を問う

東京大学大学院教育学研究科
教育研究創発機構・学校臨床総合教育研究センター共催
公開シンポジウム

2005年7月2日(土) 13:00~16:00

東京大学本郷キャンパス 赤門総合研究棟1階第7教室

- ・発表者 倉井 優臣 (絃文塾・塾長)
佐藤 雅彰 (センター協力研究員／元
富士市立岳陽中学校校長)
車明姫 (チャ ミョンヒ) (在東京韓国
人のための塾、上智学院経営者)
*通訳 申智媛
ローレンス・マクドナルド (メリーラ
ンド州立大学国際教育センター前副デ
ィレクター)
原 清治 (佛教大学教育学部教授)
- ・指定討論者 鹿毛 雅治 (センター客員教授／慶応
義塾大学教職課程センター教授)
山内 乾史 (神戸大学 大学教育推進機
構/大学院国際協力研究科助教授)

荻谷 それでは定刻になりましたので、これから東京大学大学院教育学研究科、教育研究創発機構の公開研究会「学校と塾の関係を問う」と題しまして、この公開研究会を開かせていただきたいと思います。私は、本日司会を務めさせていただきます、当機構の機構長を務めております東京大学の荻谷と申します。

今日は今申し上げました「学校と塾の関係を問う」というテーマで、公開の研究会を開きたいと思っております。既に皆様方にはご案内のこととは思いますが、昨年もうこういった「塾と学校」というテーマで当機構では公開研究会を開催致しました。今回はその第2回目ということで、また前回とは違う視点からいくつかの問題についてひもとくと。学校の関係を問うということで、皆さんとご一緒に議論を深めていきたいと思っております。

ここでは趣旨の説明は簡単にとどめますけれども、ご承知の通り、日本の教育というのはある意味で学校と塾という二重の構造によって成立しているということがあります。学力の問題を論じるにしても、あるいは最近のいろいろな教育改革の問題を論じるにしても、この塾

という存在を抜きに日本の教育を論じることは大変難しいというふうに考えております。これまでなかなか教育研究の世界では、この塾の問題というのはどうとらえるかということについて、必ずしも十分な研究が行われてきたとは言えないのですけれども、やはりこれだけ大きなウエートをしめております塾という問題について、当機構では、やはりこれを一つのテーマにしてやっていこうということで、この機構のもとに「学校臨床総合教育研究センター」というのがありますが、その研究プロジェクトとして、この塾の視点から学校教育をとらえ直すということをやってきました。

そこで今回は塾の視点からのご発言と学校の側からのご発言、そして更にそこに国際的な視点からの問題の提起ということで、それぞれ韓国、アメリカの方をお招きしまして、そして最後には一つ総括的なところで、社会的な視点というところで、初めに5人の方にそれぞれお話をいただきまして、後程お二人の方に指定討論者としてコメントをいただくということになります。

お話をしていただく順番に、これから今日ご登壇いただく皆様方のご紹介をしたいと思います。まず私のすぐお隣ですが、最初にお話をさせていただきます倉井優臣先生です。倉井先生は現在愛知県の東郷町にあります絃文塾という塾をなさっております。塾のお立場から最初にお話をいただきます。

続きまして、そのお隣にいらっしゃるのが佐藤雅彰先生です。佐藤先生は静岡県の岳陽中学校の校長をなさったあと、現在は民間の教育活動等を続けていらっしゃいます。佐藤学先生たちの「学びの共同体」ということで中学校の改革をなさった先生のお一人です。現在、当臨床センターの協力研究員もお願いしております。

それから向こう側に移りまして、車明姫さんです。車さんは今、東京にいます韓国人の子供たちのための塾、上智学院と言う所の塾をなさっております。日本と韓国という両方の教育事情についても詳しいということで、韓国の視点からこの塾の問題についてお話をさせていただこうと思っております。そしてそのお隣が、今日通

訳をお願いします博士課程の申智媛さんです。

そして、そのまたお隣が今度は4番目にお話をさせていただきますローレンス・マクドナルド先生です。マクドナルド先生はメリーランド州立大学の国際教育センターの前の副ディレクターでいらっしやいまして、今、フルブライトの研究員として日本の総合学習などを中心に日本の学校観察などを続けていらっしやる教育研究者です。

そのお隣が原清治先生です。佛教大学の教育学部の教授で、教育社会学のご専門で、最近学力論争についてもご本を出していらっしやいます。この5人の方にそれぞれ大体15分から20分ぐらい最初にお話をいただきます。そのあと少し休憩をはさんで、今度そのお隣にいらっしやいます鹿毛雅治先生、慶応義塾大学の教職課程センターの教授でいらっしやいますし、当臨床センターの客員教授もお願いしております。教育心理学のご専門ですよ。ね。すいません。(笑) 教育方法もやっていらっしやるから、どちらでいこうかなと思って・・・。

それからそのお隣が山内乾史先生です。神戸大学の大学教育推進機構、大学院国際協力研究科助教授、最近大学関係でも名前が長くなって読むのにつかえるんですが、そこの助教授をなさっています。山内先生も原先生とご一緒に先程ご紹介したようなご本を出していらっしやいます。社会学の視点からご発言いただこうと思って。それでは早速、皆さんのお手元に資料が行っていると思いますので、その資料をご参照ください。

倉井 ここにまずあります「塾は学校を超えられるのか」という、ちょっとどぎつい題ですが、固有名詞が出てきってしまうと大変なことになりますので気を付けてやります。

「目標達成のための塾内活動」。これについて、塾で行われている一斉授業と、学校で行われている一斉授業との相違点を私の経験からしまして、東郷町という、名古屋のベッドタウンでの話ですので、東京のようなこういう環境とはちょっと違うとは思いますが、恐らくほとんど日本中でこのようなかたちで行われているのではないかなんと思っているものを説明させていただきます。

今、学力低下と言われていますけれども、今日初めてお会いしましたマクドナルドさんに先程お聞きしましたことは、向こうの小学校、中学校で、辞書が使われているかということなんですが、きちんと使われているそうです。それから今、ここから拝見致しまして、皆様の年齢構成からいくと、かなりの方がちゃんと授業で辞書を使われた世代の方もおられます。でも、若い方の中には

英語の時間に辞書を使ったことがない、「巻末のワードリストだけ見なさい」という教育をされている方も今は多いです。それから塾の中で辞書を使うのがどれぐらいあるかといいますと、ほとんどないというのが現状でして、特に高校生を対象とするような大手塾でも1度か2度は解説はされますが、その後の指導は全くないということで、実はこれは学校とほぼ相似形ということになってしまいます。

東京はどうか知りませんが、内申点の割合ですけれども、大体どのぐらいの当日得点との兼ね合いはどんなふうになっているかということをご存じの方、おられませんか。半分ぐらい入っているわけですか。私、昭和24年生まれ、1949年生まれですが、内申点のない世代なんです。それから高校受験の時は9教科、全教科です。だから体育まで入ります。内申点がないものですから、授業がつまらない先生は何々ちゃん付けで呼ぶ。

今の内申点できゅうきゅうしている中学生を見ると、ちょっとこれは教育と呼べるのかなんというところがあります。今、高校3年になる生徒がいますけど、この生徒が中学校3年の時点で英語は毎回1番取り続け、数学は一番悪い時で第3位という成績だったんですが、内申点になりましたら1教科5点満点×9教科で最高点45において22です。22で地元の学校も当然のことながら落ちてしまいました。これは落ちるということを分かりながら一応受けたわけです。私立の高校の場合は2派に分かれまして、内申点重視というのをうたっている所と、内申点全く関係ない所と。だから、試験で全責任を負うのは私たち学校側だという態度で臨まれる所は内申点無視です。内申点が無視してくれる、愛知県ではまああの私立の特進科へ今行っています。この生徒に高校での成績を聞いてみましたところずっと優秀なままです。

塾が優位に立っているなあと思うのは、ほめることです。ある大手のチェーン塾なんですけど、「一番大事なことは、生徒ができた場合にどうするか」というマニュアルがありまして、「よっしゃ、ようやった」と、こういう言葉遣いでやりなさいと。今そこで活躍していますが、採用試験の時にうちの塾で習った程度のことを言っただけで「即戦力」ということで、一度も指導を受けずに今もやっている講師がいます。

次ですね。『宿題』における学校との相違点ということなんですが、最近は学校のほうも宿題の量がかなり、年々といっているいいか、少なくなっています。それから公立の学校で愛知県じゅうに名前がとどろいている高校がありまして、かつて体罰ですごい学校だったんですが、今はその体罰がほとんどなく、一番学校らしい学校です。

本来の学校の姿に戻りつつあるという所でも、前は宿題の山でしたが今はほとんど宿題も減ってしまって、あまり出さないような状況にはなっています。

それから高校のことでいいますと、私立の、順位でいくんでしたら一番トップの所と、それから第2位のレベルの所と第3位、第4位とこう続くわけなんです、第1位の所では適量ですね。本当に適切な量です。それから各教科出されるのをちゃんと教職員のほうで配分を決められるそうです。それで実際に先生方も解いてみて、これぐらいの量でやれば1日に1時間半とか2時間でやれるなという量を計量しながらやっている所もあると。

一番問題になるのは、第2位に着けているような所になりますと、今度は宿題の量が異常に多いわけです。ということは、たくさんやっていかないといけないものですから、どうしても全部やっていると時間が足りません。それで先生は大体ほとんどめくら判を押してくださるそうなので、「とりあえず出せばよい」ということで、学校へ早く行ってだれかのを写させてもらう。それからもうちょっと組織的にやろうと思えば、みんなで「君はこのページ、やっておいてね」ということで、学校へ早く行って何とかかんとか間に合わせをする。それから授業方法もまず一番気になってしまうのが学習法で、つまり勉強するのにもっとも効率の良い正しい学習法ではなくて、物量でいくんですね。物量でいって、おまけに「暗記しなさい」と。「この理由はなぜですか」ということに対して答えられない。「とりあえず暗記しなさい」と暗記の一点張りだそうです。

それから、宿題は高校の場合は行っている学校によってかなり差がありますが、塾のレベルで見えますと、塾と、一般的な公立の学校で、しかも中学生を対象としているということにおいて言いますと、宿題も年々減っているなあという気がします。一部のかかなり上位の学校を目指す場合は、塾の場合は相当量ありまして、いろんな本当のことを言いたいんですが、固有名詞を出したりするとなかなか危ないものがありますので、その辺はご容赦いただきたいと思います。

それから『『テスト』における学校との相違点』ですが、これも非常に難しい問題があって、いわゆる「あそこに行くといい高校へ行けるぞ」という所の指導方針として、テスト前には、愛知県の中学の場合には場合は習熟週間というのが始まりまして、部活動もはやばやと1週間前からはなくなるわけです。その間に塾も開いて、一番長い所でいうと、僕が知っている塾では午前3時とか4時までテスト前の追い込みをやるわけですね。当然のことながら内申点は非常に高いです。僕が見ても驚くぐ

らい高いんです。「ほとんど第一志望に入れるぞ」と豪語しているだけありまして、入れます。実際に。入って、その後のことは親御さんはあまり追跡されないようですが、僕が知り得た範囲内でいくと、あんまり芳しくありませんね。中学校範囲だからやたらに暗記することができましたけど、高校行ってからその方程式が全く成り立ちませんので、うまくはいかない。

塾の集まりなんかで僕も前は行っていたんですが、2、3回行ってそれから行く気がなくなって行っていないで、現在の状況がどうかというのは分かりませんが。「倉井さんの所は何々中学の過去問を何年分持っておるか」と、「え、中学校の過去問って何ですか」とお聞きしたら、「中間・期末テストのテストだよ」という返事が返ってくるんです。で、「うちは10年分持っとる。何々先生は異動で、同じ町内で今度ここへ行っとるから、あそこの対策も万全だ」という話で、それが自慢の種になってしまうわけです。だからそれをしっかり持っている塾がいい塾と、親御さんのほうには映るようです。もうこの辺は、僕はもともとサラリーマンでしたので、ちょっとびっくりで、「塾業界というのはなかなか恐ろしいところだなあ」と、「そこまでやるのか」という気持ちがありまして、お付き合いは本当にしづらいですね、今は。

テストはそういうふうで、だれだれ先生まで名前を名指しでちゃんと塾のほうでデータを持っています。それから、そのデータの処理の仕方ですが、塾講師がそれぞれまたそれを持ち寄って自分たちで正解を出すのではなくて、どういうふうに出すかという、塾の中で一番成績の良い生徒に、問題と解答とをお願いをするわけです。だから「今度、宿題、中間・期末テストの資料が出たらそれをください」ということで、それを渡すとどうなるかという、ノート5冊、鉛筆何本とか、ボールペン何本とかいうのをいただくらしいです。それに選ばれることも非常に名誉なことらしいんです。だからそれをそのまま解答にしているわけです。塾から何か新しい視点を加えとか、新しい説明を加えとかいうのはあまり聞かない話です。自分で塾やっておりながら言うのも変ですが、ほとんどの塾、9割以上はこういうふうではないかなというふうに思います。辞書を使う塾はないというところから見ても、そうではないかなというふうには思っています。

それから『『合格率アップ』のための秘策』とありますが、学校の場合は学校さん独自で考えられてやるわけですが、塾の場合は学校というものがなければ何もできない存在なんですね。自分で考えて問題を作るわけでも

ないということで、「だれのまわしで勝負しているのか」ということになっちゃいます。

それから一番目立つのは、英語の辞書使わせないというのと、それと連動しているかのように、高校の先生でも単語の品詞や働きを調べず、ただ単語の和訳しか調べさせないということになっちゃうんです。まず、英単語を調べますよね。で、英単語の調べ方も子供たち、知らないんです。辞書の上部の左右の端に載っている単語の範囲内に調べたい単語がなければ、さらにページをめくればよいということも知らないわけです。ということで、めったやたらにめくってしまう。私は小学校1年生で代用教員であったお寺の住職から教わって、もう辞書の使い方は慣れてましたので、上の部分だけ小さく開いてみて、調べたい単語の近辺へ行ったらそのページを見るというのは常識として知っていますが、今の塾生のやり方を見てると、全体を見ながらめくるものだから、僕と比べると4倍、5倍ぐらい時間がかかってしまいます。こんな基礎的なことさえ教えられていないと、僕は、非常にこれは問題だと思います。

それから高校でかなり上位校の場合、ここに英単語がありますよね。で、生徒が一番見るのは太字で書いてある和訳です。和訳をいくつも書いていくわけです。それでこの和訳を、組み合わせで解くわけなんです。で、こういうことをやる先生がほとんどだということで、うちの塾生の、なかなかこれはしゃれてる生徒ですが、それは理系の生徒で、「先生の組み合わせでいくと、これは168通りでできてしまう。168通りの組み合わせの中から一つを選ぶのはどうしたらいいですか」とお聞きしたところ、「国語力で考えなさい」と。

確かに英語を訳すとき、国語力も必要ですけども、文法力も構文力も、そういうものがが必要になると思います。で、そういうこと一切無視で「日本語で考えなさい」と。それである日ある高校の先生がご自分のノートを教壇へ忘れて行ったわけです。しゃれてる子供たちですから、すぐコンビニに走ってコピーしまくりで、次からそのクラスはかなり良い得点だったという話も実際に聞いています。

ある日、職員室に質問に行きましたら、その先生が予習の真っ最中で、何をやっているのかと後ろに立って見てたらしいんですよ。そしたら和訳を一生懸命つぶやいてるんです。「あ、そうか。先生は教室へ来られる前にこうやって覚えてるんだ」と、ちょっとびっくりしたらしいんです。そういう先生方が今はちょっとずつ出始めているというのも非常に問題点ですし、例えば「何々を見る」というとき、「ルック・アット」と来ますよね。

それから「探す」というとき、「ルック・フォー」としますね。それから面倒を見ると、「ルック・アフター」としますよね。なぜこれでなければならないのかとか、なぜ世話をするとときに「ルック・アフター」でなくてはならないのか、そういうのを教えてもらったことがある生徒は、ほとんど、皆目ゼロ状態です。この中で分かる方おられます？「ルック・フォー」が、「探す」という意味が出るというのは、どこから出るのかという・・・。マクドナルドさん、どうでしょう。(笑い)

どうしてこれは「ルック・フォー」なのでしょう。日本人は分析好きですので、この分析というものを使っていくと、非常に面白い授業ができるんです。例えば'at・on・in'を使っていくと、あっと驚くようなことでできてしまって・・・。すぐに塾口調になっちゃうんです。生徒には覚えやすいように、記憶術の一つ、「アトニン」と唱えながら三角形を描かせます。するとここに弓矢の矢が出てきますね。弓矢の矢が出てくるということは、矢の先は細いほうがいいわけです。「細い」、だからこれは「狙う」という意味で、視線を飛ばすようにして「狙う」ということです。それでこれは時間にも使えます。例えば「7時に」というとき、'at seven' という。'at' が来ますよね。それが、1時間が24集まると、1日ですよ。こういうところに日にちの場合は'on'を使う。それから1日が7つ集まれば1週間ということで、1週間から先はみんな'in'でいいんだと。「1987年に」という場合に使う前置詞'in'を用いて'in nineteen eighty-seven'と、こういうふうに使えするというふうに。

それからこの'for'というのは、もともととはサッカーとかラグビーかな。'forward'というの、ありますよね。ということは、これはもともと「前へ」という意味が出てきて、「前へ」出てくるから主役を表し'for me to do'のように不定詞の意味上の主語を表すことができますし、「前へ出ていく」ということは、「追求」の意味が生まれます。後ずさりしておったんでは、学問でも何でも、追求することはできません。この「求める」という語義がありますから、「求めながら見る」ということで'look for'は「探す」になる。

ということで、詳しい説明をしながら学習させる。これが本来の一番正しい姿だと思います。そのためにも辞書を使うこと、参考書を使うこと、こういう大切なことをもっともっとどちらも教えるべきだと思います。学校、塾、問わずですね。そうしないと正しい連携ができないと思います。以上です。よろしくお願い致します。

荻谷 どうもありがとうございました。皆さま方からい

ろいろご質問とかご意見もあろうかと思いますが、時間の関係もありますので最後の総括討論のところでご質問を受けますので。続きまして、佐藤先生のほうからお願い致します。

佐藤 それでは、中学校と小学校の校長をやった経験でお話をします。どちらかといいますと、高校の生徒の気持ち等はあまり聞いておりませんので、ご容赦願いたい。

最初にお話ししたいのは、学校と塾の違いです。非常に簡単でして、学校教育法の第1条に載っているか、載っていないかで決まってくるだけのことなんです。学校教育法の第1条に「学校とは」と書いてあって、その中に塾はないわけです。学校教育法の第1条に載っている学校は、実は文部科学大臣の指示を守らなきゃいけないという設置基準があるわけです。塾はその設置基準に従わなくてもいいということですね。結論を言うと、何をやってもいいということなんです。簡単に言えば、そういうことです。それをまず大前提に置きたいということが一つです。

そういうことで、私が現職にいた時に塾をどう見ていたかということを中心に、私の周りにいる先生方のお話をまとめてみたこと、それから、本当に私個人の考え方で、課題というか、問題というか、そういう提起をさせていただきたいと思います。

最初に倉井先生から調査書の話も出てきましたけれども、調査書の問題というのは各県によって趣が違います。ですから、東京都がどうであれ、「静岡県が」と言ってもなかなか話が伝わらないような感じがするんです。ただ静岡県の高校入試は、公立高校に限ってお話をしますが、前期と後期がありまして、前期はどちらかというと調査書重視です。最近はそのに各学校が基礎学力を試すという、各学校で問題を作る。なぜこうなったかという、どうも調査書が信用できないということが一つあるのではないかと。

後期の試験は、調査書とアチーブメントテスト。アチーブメントテストは県下一斉の問題ですけれども、相対評価から絶対評価に変わった時に、各学校を受ける生徒は、大体粒がそろってくるわけです。ですから差が出ないんです。調査書は5段階評価ですね。そうするとある〇〇高校を受ける生徒の調査書を見ますと、ほとんどオール5とか4と5だろう。そういう子供たちが受けますので調査書で差が出ることはないです。そうすると、当日のアチーブメントテストが非常に重要視されるという結果になるわけです。

そこでどうなるかということ、子供たちは不安になるわ

けです。親も不安になるわけです。このままいって〇〇高校に受かるだろうとか、大学で〇〇大学に受かるだろうとか、そういう不安になるわけです。しかも、こういうことを言っただけですけれども、チラシ広告を見ますと、もうあおり行為ですね。こう書いてあります。「塾へ行かないと有名高校、大学に進学できない」と。二つ目は「塾に行かないと学校の勉強についていけないよ」と、甘い声でささやかれますと、つい乗ってしまうということもありますね。今、ゆとり教育によって、非常に塾が活性化されたとは思いますが、学校の勉強だけでは、「～だけでは有名高校にいけない」という、そういう言い方します。「だけでは」と付きます。

それから「学力」といえば「学校の勉強だけでは学力がつかない」と、こういう書き方をしています。要するに「学校だけでは駄目ですよ」と。簡単に言えば、そういうことですけれども、こういうことはどうかと私は思いますけれども、これは学校の外でやっていることですから文句の言いようもないところもあるわけです。

次に、これは「優秀な子供ほど多い」と書きました「学校は自分の力をじゅうぶん伸ばしてくれない」と、こういう意見もあります。確かにそういうことも感ずることはあります。それから「あの友達が塾に行くなら私も」と。これは友達に誘われてというか、何か不安になるわけです。友達が、あの子は行かなくてもいいだろうと思った子が行くと、自分が負けてしまうんじゃないかと、そういう不安感だと思います。

それから、「学校教師の授業力」。荻谷先生のお言葉を借りれば「教師力」ですけれども、「教師力が低い」という先生もおられます。現場ではそれをどうするかということは、非常に大変な思いをして先生方と対峙していくわけです。

意外と多いのが「塾を社交場に使っている」と。逃げ場ということですね。「お友達とおしゃべりをしたい」。大体の学校側で、「個に応じた」とか、「個性に応じた」と言って、個に閉じたような教育を致しますから、仲間と仲間がある知識を分かち合うというようなことよりも、何か個別に動いていく、ばらばらにされている。だからうちへ帰っても、最近どこへ行っても子供が遊んでいる姿が見えないわけですね。どこにいるんだろうかと思うくらいみんな個別になっているわけです。そこで夜、友達とおしゃべりをしたい。勉強するわけじゃないです。親は「今から塾へ行くよ」と言うと安心するわけです。安心して行かせるわけです。その実、子供はうまくそれを使っているわけですね。

それからもう一つ、「親の過干渉」。最近是有名高校と大学へ行かせたいですから、とにかく「塾へ行って勉強しなさい」と言う。盛んに言います。ところがそういうことから逃げたい。特に塾に行けば逃げられるわけですから、そういう子供もいるということです。

次は「補習」のかたちでいく。これは有効に機能しているのかなというふうに思うんですけども、大体家庭学習をやらないわけですから、この間の荻谷先生の調査だったでしょうか、ゼロ時間が2割という報告があったような気がするわけですけども、家庭学習の時間がない。それから「家庭学習の仕方が分からない」。中には非常にまじめに「できるようにになりたい」と、学校だけではなく塾で勉強を更に続けたいと、こういうふうに考えておられる。

それから、「さまざまな問題を抱えて」ということですが、フリースクールとかいろいろなものがありますね。これは、非常に学校としてはありがたいと思っています。こういう場所があるということが、子供たちにとっていいかなと。本当は学校の中でそれができると一番いいと思うんです。

「功罪」というような、きつい言葉を使いたくなかったんですけども。もし、塾に行っている子供を、学校から見たらどうだったのかなと振り返って見たときに、プラスはいいほうに、と思ってください。要するに「家庭学習を補う」ことができる。それから前もって「予習ができる」。それから「個に応じた指導が受けられる」。こういう点では利点があるのかなあというふうに思います。

今度マイナスのほうを考えてみますと、「成績の芳しくない子供が無視されている」のではないだろうか。要するに一部の塾ですけども、そこは大体入塾テストがあるんです。そして低学力層がほとんど切られるわけですね。入りたくても入れないわけです。それはなぜかという、その塾が〇〇高校何人、〇〇高校何人ということの効果として出したいわけですね。だから低い生徒を入れたらその数が減ってしまうわけですから、最初から入れないということです。

いろんな塾の〇〇高校合格者数を全部合計していきますと、定員募集よりも多くなってしまいます。つまり自分の塾へたった1回だけ来れば、自分の塾で指導を受けたというふうにとるわけですね。ですから、非常にごまかしも入っていることもあります。けれども、見た親はその数に圧倒されて、大体数の多いほうへ希望するわけですね。そういう所は大体優秀な子が希望しますので、ますます入塾が大変になる。それからそういう塾は、「志望

校別クラス編成」というかたちを取っていくというような、これは静岡県私の地方の塾ですね。

実は東京都の子供たちはどうか分かりませんが、私たちのような田舎はそんなに塾は、行っている子供ばかりではないですね。5割の子が行くという、そういう感じの所です。それから私、九州のほうの学校も行きましたけれども、九州の学校でいいますと、山あいの小さな学校で塾がないという所もあるわけですね。だから今日の話は全然関係ないというところもあるわけですね。

その次、予習ができるということは非常にいいように見えますけれども、前もって教科書をやっておくわけですね。そうしますと、例えば数学でしたら問題もやり方も答えも全部分かっているわけですね。その子供たちが授業を受けたときに全く同じことをこういうかたちで授業されたらつまらないわけですね。その子供たちがさっき言ったように、「学校は自分の力をじゅうぶん伸ばしてくれない」という声につながるわけですね。

要するに「教材が、出会いが楽しくない」んです。同じことを同じ繰り返すわけですね。ですから楽しくない。やっぱり学ぶというのはどきどきはらしながら受けるというのがいいと思うんですね。次は何出てくるんだらうとか、次は何を考えていくんだらうとか、そういうことが勉強の楽しみだと思うんです。全部分かっていることを、おさらいのようにやっている学習だけだったとすれば学校はつまらない所になってしまう。

さらに、「順位、できるかできないか」、こういう価値観が塾通いの子供たちに多いような気がします。あの子よりも勝ったとか負けたとか、この問題ができたとかできないとか、学問するということ、学ぶということはということだろうかということではなくて、結果だけなんです。結果に至る過程が大事だと思うんですけども、結果的には「答えの間違いはバツ」と、こうなっちゃいますね。

でも、本当は学ぶ喜びということはその過程の中にあると思うんです。残念ながら入試というのは結果だけを見ていきますから、そうもいかなところもあるわけですね。こういう価値観がやっぱり植え付けられてしまう。テストをやりますと、「先生、何番？」と必ず聞かれる。「君、テストの何番を付けるためにやっているんじゃないんだよ」と言うのと、「何番ぐらい分からないと、私、どこの高校へ行けるか分からない」と、こういうふうになるんです。「大丈夫だよ」と言っても、どうも何か学校を信用してくれないというか。順位でないと信用できない。そういうふうになってしまった。

それから、「階層差による不平等感」ということです。

塾の費用は非常に高いです。で、「出せる親」と「無理して捻出」というのがありますね。「この親、経済的に大丈夫なのかな」という親がいるんです。そういう親は大体夜遅くまで働いて子供は塾に行っている。そうすると家庭の中でぬくもりだとか、家庭教育の中で育ていくということはおろそかにされるわけですね。ただ単に学力だけというような人間を育てているというか、人間形成はどうしているだろうか、というようなところが心配です。

その次は「出せない親」と書いてあるんですけれども、この子供たちが一番かわいそうですけれども、一番頑張る子です。正直言いますと、「僕は塾に行っていないけれども学校で頑張るよ」、学校というのはこういう子供たちの為にあるんだと、私いつも自分が現職にいた時に思いました。塾へ行かなくても済むような学校にしようと、そういうふうに思ってやってきたわけですから。

さて、最後ですけれども、三つ挙げましたけれども、学校と塾の違いを言ったわけですから、括弧書きが私の気持ちです。塾がいいとか悪いとか、どうでもいいとは思っているんです。なぜかという、塾は、お金を払ってその子供たちが行くわけですね。払った子供に対して責任を負っているわけです。学校はそうじゃないです。学校はただ単に学力だけ上げようと思っているわけではないわけです。もっと違うことまで含めて、よりよい人間形成をしているわけですので、先程、倉井先生は効率よくテストをクリアするにはどうしたらいいかということをやるとしても、学校というのはそれだけを教えるところではないです。ところが、塾が価値観を変えていきますから、本来の教育ができなくなっていく。それから教師そのものに、本当の学びを追求していくような力が弱くなっているんじゃないかなというふうに思います。

そこで、「学校が塾化していく」ということですね。要するに先生方の指導力がないものですから、最近では「公立学校の教師が予備校で指導法を学ぶ」というような計画をしている県もあるようです。ある高等学校の先生に聞きましたら、この春休みに予備校へ行って指導法を習う。予備校に行くと学ぶということは括弧書き。これだけじゃないと思うけど、暗記とか、ドリルとか、やり方のテクニックとか、こういうことが主体の指導法なわけですね。それを学ぶということですので、本来の教育とはちょっとはずれていくように私は思います。

二つ目は、「優劣を時間で競う」。「大村はま先生の遺稿詩『優劣のかなたに』」と書きましたけれども、最近

亡くなられました大村はま先生の一番最後に残した詩が「優劣のかなたに」ということでした。要するに学校というのは、できるとか、できないとかそういうことで人間を区別するのではなくて、そこに至るまでに努力した過程を大事にすることです。その中で学ぶ楽しさを味わったり、学ぶ喜びを味わったり、そういうことをすることが大事なんだというふうに大村はま先生はおっしゃっているわけです。もちろんできるということは楽しみになるわけですが、もっと違う意味の楽しさとか、喜びとか、そういうものを与える必要があるのではないかな。あるいは仲間を支え合うとか、仲間に支えられたとか、そういうことも含めて学ぶべきものがあるのではないかなと。

最後ですけれども、時間が来ましたので、「学校が主体性を発揮できるか」ということですが、やはりこれからの学校は一人一人の子供をどう育てていくか、その子供たちの学びとそれから人間的な形成にどうかかわっていくかということを真剣に考える先生方をもっともっと増やさなきゃいけない。だけれども、先程言いましたように、ちょっと教師力が落ちてきているのかなあという感じも致します。地方分権下になったときに、財源力が弱い県が優秀な教員が取れなくなるということだって考えられます。ますます地盤沈下していく。そうするとますます塾が繁栄するという感じもするわけですが、塾に頼らない学校を私たちがこれから作っていかなくちゃいけないというふうに思います。大変早口で短い時間で申し訳ありません。以上です。

刈谷 どうもありがとうございました。本当にこちらの構成をする側の責任で、それぞれの先生方、本当はもう少しゆっくりと時間をかけてご発表いただきたいし、また皆さん方からもそれぞれの個別でのご質問をお受けしたいんですが、時間が押しておりますので、最初に申し上げましたように、総括討論のところで質疑というかたちで進めさせていただきます。

それでは続きまして、今度はお二人、海外の視点からということで、最初に車先生から、韓国という視点から日本の塾、あるいは韓国の塾についてお話を伺いたいと思います。それでは、よろしくお願い致します。

車 アンニョンハセヨ。こんにちは。車と申します。(以下、車先生の原稿に基づいて構成)

お目にかかれて嬉しいです。日本で暮らしてはいますが仕事の性格上、ほとんど韓国と同じ生活環境ですので日本語があんまりうまくありません。ご理解よろしくお

願います。

まず、韓国の教育熱は世界でも例をみないほど加熱です。父親の1ヶ月の給料以上に教育費として支出される家庭も多いし、良い学校がある地域の住宅・マンションは同じソウルでも10倍以上の値段で取引される異常ともいえる現象をみせています。

名門の学校に固執する韓国人の教育背景にはいろいろな理由があります。まず、歴史的に韓国の朝鮮時代には、ヤンバン・スンビ・農業・工業や商業を職業とする人、賤民(階級の一番低い人)の身分階級がはっきりと区分されていました。ヤンバン出身で勉強の得意な人は富貴永世が保障されるから、勉強を重要視するしかありませんでした。

2番目に、韓国の伝統思想は儒教思想に根幹をおいてあります。親孝行と礼儀を重んじるようになりました。親の志を慮って立身功名するのはすなわち、出世は最高の親孝行としてとられましたのでまた勉強です。

3番目に、韓国は非常に小さい国でありながら人口密度が高いです。10万平方Kmも満たない国土に4800万の人々が住んでいます。学校も会社も競争です。母親たちの話題のほとんどは子供の教育問題です。

これからは、いま現在の韓国の教育に対して大きく分けて話をしたいと思います。学校教育は日本と同じく6・3・3・4年制で入学時期は3月です。高等学校はいろいろな目的に分類されています。大多数の一般人分系、実業系、工業系、商業系の学校を除いては、試験に試験を重ねて天才・英才だけが入学できる民族士官学校、科学高等学校、外国語高等学校などがあります。

授業の形態、方法もさまざまです。民族士官学校の例を一つ紹介すると、1クラス15名で教師:学生の比率は1対5です。この学校の最低入学条件は全校成績優秀者の1%以内、TOEFL 240点、TOEIC 800点以上、TEPS 710点以上、各種の競試大会入賞者です。全寮制でもあります。大学への進学はソウル大、延世大学などの名門ばかりです。この以外にも芸術高校(音楽、美術、体育)などがあります。

また、もう一つ、海外早期留学が社会現象として現れています。韓国の、特殊目的ではなく、平均化された教育の短所を海外語学留学で解消しようとするようです。年に1万名以上が小中高のとき親につれられ海外早期留学に出かけています。ドルの消費が深刻な社会問題ともなっています。子供だけが留学に行くか、母親がついていく留学で、父親だけが韓国にのこって経済的支援をしながら家族がはなればなれに住んでいる父親を「渡り鳥パパ」とも呼ぶ新生語までうまれました。

これからは、学院(学習塾)についてお話いたします。学校教育だけではまかなえない問題点をうまくキャッチし、それを解決した目的のはっきりしたプロ集団ともいえます。Aという学生をB大学に入学させる。Cという学生をTOEFL何点以上とれるようにする。学校の試験、国家試験に100%合格を目標にする。

韓国ではこれといった学院では、家から塾、塾から家までのシャトルバスも運行しています。授業ももっと専門的な講師たちがレベルに合わせた授業をするためその効果が現れるしかないし、予習をしておいた学生の場合は学校の授業がおもしろくないのは当たり前です。青少年教育相談院の2001年の統計では授業中1日1時間以上寝るが18.6%と出ています。その時教師たちの反応は「少し注意して起こす」が48.9%、「そのまま授業を進行」が23.3%、「きびしく体罰」が2.4%です。寝る理由として主に、面白くないから、疲れているからでした。

最近では出版社や企業からでも学院を経営する事例も多いです。そして、学院ではTV及びインターネットの映像講義などサイバー教育が一般化されています。どんどんはやいスピードで学校教育の水準を追い越していくこととなります。

最後の結論として国家と学校、学院が相互補助的関係を維持する教育方法を提示します。

1) 国家的次元の特殊目的高等学校を設立することです。教育は被教育者の潜在性をみつけ出すことです。人材を養成しなければなりません。勉強の意欲が高い学生の要求を満たさなければなりません。(韓国のソウル大のBrain21が世界的におどろくほどの学問の実績を挙げている点)これからの世界は創造的な専門人材が国家競争力強化の牽引者になることを認識し、多様で差別化された教育をしなければなりません。日本のトヨタ自動車で「イートンスクール」設立で次世代のリーダーを養成するという計画はとてもいい見本です。

2) 学校教育は改革・革新されなければなりません。学校は自律化されなければなりません。アメリカのブッシュ大統領の「No Child Left Behind」政策で学業成熟度が低いというのはけっして失敗ではありません。教育の体制にではなく教師は生徒に奉仕しなければなりません。非能率的な教育体制を見直さないといけません。教師教育の効果的、学習戦略のプログラムを開発しなければなりません。授業の動機が与えられ、生徒との共感の形成に努力しなければなりません。必要性に基づく科目、少人数の授業をしなければなりません。担任、副担任、補助教師が必要です。宿題で動機を誘発させ、学習伸張の遅れた学生の補習の契機にさせなければなりません。

宿題プログラム、個別学習、読書なども効果はあります。学院の講師を学校の時間講師として採用する。学校は学校での基本教育に充実。能力別授業、すなわち英語の聞く、話すは外部のA先生。国語の作文は外部のB先生といった形式で学習します。

教師の事務的な仕事を減らし、生徒に教育の愛情をもっと投資しなければなりません。成績管理や教材の研究開発もできます。教育は人を育てる過程です。教師マインド、心構え、愛情の備わった、行動力のある教師を養成しましょう。

荻谷 どうもありがとうございました。たくさんのご質問があると思いますが、先へ進めさせていただきます。続きましては、日本とアメリカの教育に造詣の深いマクドナルド氏にお願いしたいと思います。

マクドナルド みなさん、こんにちは。私、マクドナルドと申します。覚えやすい名前かと思いますので、よろしくお願いします。(笑い) マイク持つと何かカラオケ歌いたいと思いますけど、今日はまじめな話をします。

さっき、最初恒吉先生と話し合っただけで塾の立場、アメリカの塾はどんなふうだと話したらよいということを伺いました。アメリカには塾がないってことでもう帰らしてもらいたいと思ひまして。でも、そんな簡単ではないんです。やっぱり競争力、けっこう厳しくなったし。今、さっき伝えた通り、アメリカの教育政策、基礎学力を上げないといけない、高めないといけないという意見が強くなったんですから、これから塾は増えるかなと私は思います。

とりあえず、そういう子供たちの進学のやり方、説明から話したいと思います。まずは義務教育のことなんです、日本と違って5歳から、幼稚園から義務されております。ほとんど、6歳で小学校入学なのですが、6歳超えて、ちょっと早めに。9月で始まるんですけど、9月1日ですらないと入学できないということではないんです。9月まで入学できないことはないから、相談して、行けるかどうか、子供の様子を見て入る、入学するかどうか相談しますね。

6-3-3制度なんですけれども、ミシガン州では5-3-4のかたちになりました。高等学校は4年間、こういう所があちこちでありますので、全部6-3-3ということは言えません。義務教育は16歳まで、もしかして16歳になったらやめたいと思えばやめてもいいんです。16歳になったら、一応高等学校に行ってる間ですね。1年生か2年生。日本と違って、アメリカの場合は年齢

として16歳ということですから、ちょっと違うと思います。

コンプリヘンシブ・ハイ・スクールを私、包括的と言ったのですが、それではちょっと意味がつかみにくい。施設が一緒で、子供と大人が同じ所で勉強するんだけど、プログラムが多様なカリキュラムで行うわけです。例えば、アカデミー系が最近はずいぶん大人気で、例えば福祉関係、理数系、ビジュアルアート、美術系。一つの高校でいろいろなプログラムを行っています。子供が入学する時に相談しながら、「えーと、どっちにしようかな」ということに決めます。指導をされながら、先生方と相談して進学します。

次は、アドバンスト・プレースメント (AP)。高等学校で大学の単位が獲得できます。試験があるんですけども、いろいろなAPのコースがあります。だから、高校の時は大学の単位を獲得することができますので。

その次がマグネットプログラム。一つの学校の中に特別なプログラムがあります。IT関係、理数系、芸術関係など、どれかに優秀な子供たちがそういうプログラムで受けたい、勉強したい。入試はあります。受ければ、学区を越えて行くことができます。

最後は、インターナショナル・バカロレア・プログラム。これは国際的なプログラムなんですけれども、欧州から生まれたものと思います。最近アメリカの高校ですごい人気のプログラムです。日本の高等学校にあるかどうか、私、分かりません。何かありましたら教えてください。

じゃあ、一つの例としてこの高校のプログラムで説明したいと思います。インターナショナル・スタディ・アカデミーというものがあります。五つがあるんですけども、一つとして、国際的な学習、外国語、ラテンアメリカン、アフリカンアメリカン、中東、東洋の研究。どちらかと言えば、アフリカンスタディーズとか、アフリカン・アメリカン・スタディーズという言い方をしますね。まあ、人類学、国際ビジネス、政治など、いろいろのプログラム、その国際的なプログラムを行うわけです。

2番目は、メディアリテラシー、視覚芸術かあるいは公演芸術、マスメディアというプログラムです。三つ目のヒューマン・サービシーズ・プロフェッションズ・アカデミーと言うのは福祉関係、栄養学、看護、一般教養。犯罪学というのは、これ日本語でぴんときないのですが、クリミナリティと言います。刑事になるような勉強なんです。まあ、どっちかと言うと心理学的な勉強ですね。

それで、マス・サイエンス・アンド・テクノロジー。理数系、IT、コンピュータプログラミング、エンジニ

アリング、環境問題などを行うプログラムです。五つ目は、アントレプレナーシップというところが、ビジネス学、マーケティング、広告、アドバタイジング、会計学、職場体験を一番大事にしています。

五つのプログラムのどれかに高校生が決めるわけです。こっちにしたいか、こっちにしたいか。もう一つはマグネットプログラムということがありまして、特別なプログラムで理数系や芸術系などを受ける。学区内と書いてありましたけれども、学区外でも可能です。ただ、メリーランド州だったら、郡ごとに学区が作ってあります。この高校が、一番下のワシントンDCの隣にある学校だから、もし郡の多くの所からこのプログラムに参加したいんだったら、入試を受けて、入学するんですね。ただ、理数系のほうが多いんですね。ITが多いです。インフォメーションテクノロジーのプログラムが多くて、あと、芸術関係、パフォーミングアーツというプログラムが多くあります、マグネットプログラムの中に。

アメリカと日本と違うと思うのは、特に、学校以外の教育機関ですね。青年スポーツがあったり、教会、宗教の関心の活動。参加してない子供もいると思いますけれども、まあほとんどが、何割ぐらいか言えないんですけども、そういう触れ合い、学校以外のきっかけとして何か活動を行うわけです。青年スポーツも多いんです。野球、アイスホッケー。私はアイスホッケー8年間やりました。

サマーキャンプがあります。もう夏休みが長いから、音楽関係、スポーツ、IT、あるいはいろいろなサマーキャンプ。お金がかかりますよ。けっこう高いところもあると思うんですが。あとサマースクール。普通の学力が足りない子供たちのため、一般教科の補習、特にESL、数学など、けっこう弱い面が、ほかの補習が夏休みに受けられます。

で、まずは大学にどうやって入るということにすると、アメリカの場合は一応入りやすいとみんな思われると思いますけれども、スカラシップ・アティテュード・テスト(SAT)は必ず受けなくちゃいけないんです。大学進学適正試験ですね。学力試験と違って、ちょっと説明しにくいのです、遠慮します。

SATリーディングテストという論理的思考テストですね。これは、三つに分けて、リーディングコンプリヘンション、つまり読解、あと数学と作文。作文が新しいのです。最近出てきたばかり。1番から4番まで丸を付けてくださいというかたちだったんですけども、作文が最近できました。

その二つ目は、サブジェクトテスト、つまり教科テス

トです。文学、歴史学、面白いのはジャパニーズ、コリアン、チャイニーズ、日本語、韓国語、中国語のサブジェクト。教科テストが実施されるわけですね。2007年、あと2年後です。

得点の平均は500なんですけれども、大学のホームページ見るとどのぐらいの得点が取って入学できるということがほとんど書いてない。ただ、平均的にはハーバードだったら600から800までなんですね。でも、600取らないといけないとか、そうしないと申請しないでくださいとは書いてないんです。SATの得点で入学できるかどうかは一つの測り方です。

SAT受験コースがあります。それはアメリカの塾と言えます。値段も書いてありました。900ドル、6週間、12クラス、36時間。日本の塾と比べたら高いですか。それともそんなもんでしょうか。分からないんですけども、SATのいい得点を取りたいんだったら、高校生がよくそういうコースを受けます。

まずは、米国の大学、入学がしやすいでしょうか。とよく、「入りやすいんだけど出にくい」とよく日本人が考えております。メリーランド州立大学が私の母校なんなんですけれども、受験者数ですね、2万人が一応申請しました。その中で合格した人が4,100人、割合では、4分の1しか、入学できてない。それを見ると入りやすいと言えませんでしょうね。

ただ、編入だったら、特に短期大学に2年間行って、その単位を4年の大学に持って行って、入学するのはもっとやりやすい。というのは、受験者数が7,000人のうち、半分の3,200人が入学できました。だから、これからは、コミュニティーカレッジとかいろいろの短期大学があって、それで2年間行って、その単位を持ちながら編入するケースが多いと思います。

じゃあ、最後の所なんですけれども、今の政策、ゆとり教育なので、私、「総合的な学習」のことを今見学しております。日本とアメリカは政策的には逆方向行っております。ゆとり教育から基礎学力に進む傾向がある。どう思うかという、やっぱり反対が多いと思うんですよ、学校の先生の中に。その「ノー・チャイルド・レフト・ビハインド」この政策は間違っていると考えている先生が多いんですよ。

まずは、3年生から8年生まで、学校が学力テストを行うわけですね。子供たちが分かっているわけじゃなくて学校がうまくいってるかどうか、学校の評価なんですよ。学校の評価が上がったら悪影響。子供にストレスがたまらないという意見があるんだけど、そんなことはないでしょう。校長先生が緊張するから、それで学校の先

生が緊張すると、子供も緊張するんです。それ、うつってしまうから、けっこうみんな慌ててしまう状態です。

どんなかたちか、けっこう混乱しています。英語でも読んでてなかなか分からないですけど、まずは「州基準を満たさない場合」。ただし、州ごとに基準が違う。低い基準を作ってみんな合格できる。だから、厳しい基準を作ったり、合格しにくい所があったり。連邦政府から「この基準にしてください」と言われてないんです。州によって基準が違うということが、まずはちょっとおかしいと。

じゃあ、2年連続、なかなか満たさない場合だったら、学区内のレベルの高い学校へ転校できる、チャータースクールを含みます。その学校がつぶれてしまう状態だったら、子供をほかの学校へ行かせます。で、その上に交通費は学区の教育機関が負担するんです。もし、遠い所だったらだれがどうやって子供と行くんですか。特に小学生はバスがないと駄目だから、それでバスを手配するのは教育機関です。

もし3年間連続して基準を満たさない場合、低所得家庭の子供たちは、補習授業が受けられる。家庭教師は高いのだけれど、放課後授業、サマースクールなど。それがまた、学区、教育機関の負担ですね。お金出すのは州からあるいは学区から出さなければいけないのです。それができたのは、2002年ですね。12年の間に満たさないといけないという、今途中なんですから、あと、今、今日、今年は2005年だから4年目。あと何年ぐらいで、どんな結果が出るかみんな興味をもってます。

まずは最初の話なんですけど、これから米国の塾は増加するのでしょうか。これは公文の宣伝なんだけれども、アメリカの公文はけっこう人気ですよ。ということで、簡単ですが、アメリカの様子をちょっと紹介しました。

荻谷 どうもありがとうございました。それでは、ちょっと時間が長くなっておりますけれども、前半の発表の最後になりますが、佛教大学の原先生にお願いします。

原 失礼します。佛教大学の原と申します。今日は学力の問題を中心にしまして、その視点から見ました塾の話を作させていただきます。

佛教大学は京都にある大学ですので、この問題を考えるにあたって少しお話を申し上げたほうがいいことがあります。と申しますと、新聞なんかで、もしかしたら皆さんご存じかもしれませんが、京都の公立高校の中で、今いくつかの学校から先生方が選び出されて、その先生たちがいわゆるスーパーティーチャーで、塾あるい

は予備校等でもう一度訓練を受け、そしてその中から先生方を選び出して、勉強を教えるのに好適な先生を選び出すという制度があります。

京都だけではなくて、関西の中には、大阪もこのような制度作りに走っておりますし、宮崎県もそういう制度を採っております。明日、私これが終わりますと宮崎に参りますが、こんなことを今、調べ始めました。そうすると、いくつか分かってくるがありましたので、今日はそれを少しまとめながら、塾の機能とそれからその功罪についてを、パワーポイントを使いながら少しお話をしてみたいと思っております。

それから、余談ではありますが、見ていただくと分かりますが、私も実は小学生の、それも双子を持つ親の1人でございますので、親としての立場を少しこの中に付加させながら、問題提起をさせていただこうと思っております。

皆さんのお手元にあるレジュメは荻谷先生たちが調べました通塾児童と非通塾児童の差を前提としたグラフでありまして、これはこちらから少しパワーポイントで示すと分かりやすいかもしれません。例えば、一番下の中学校の数学なんか注目していただくと分かりますが、今から12年前の1989年の調査では、中学校の数学の通塾者の平均点が75.8、それに対して、塾に行っていない子供たちの平均点が62.5というふうに、これはあまりにも有名な表であります。この表のどこに注目するかと、2点あるだろうと思います。一つは89年も2001年もそうですが、塾に行っている子のほうが塾に行っていない子に比べて学力が高い。もう一つは、例えば一番下の中学校の数学を見ていただくと分かる通りで、例えば89年の「中学校数学通塾者」、つまり一番左側の欄ですが、75.8ポイントが2001年の調査では74.5ポイント、1.3ポイントの下降だったんですね。ところが、その横の塾に行っていない子供たちの学力は62.5ポイントから54.5ポイントへと、8ポイントも下がっているわけです。問題は塾に行っていない子供たちの学力のほうがより下がっているという問題、言い換えれば、塾に行っていれば何とか点数は取れるけれども、塾に行っていないと授業についていくことも難しいというふうに言われようになってきた点なんですね。

それと、われわれ教育をやっている人間たちは、いわゆる塾に行かない、行けない子たち、このデータをまとめたものがそうなのですが、塾に行っていないあるいは行けない子たちの学力、基礎学力をどう保障するかという視点が必要になってくるわけですが、今日は塾の問題に論点を絞ってお話をするわけですので、これについて

はまたほかに譲りたいと思います。

さて、学力の視点から見た塾の機能とはいったい何かという問題について少し整理を致します。塾には今までさまざまな方々がおっしゃっておりますが、およそ四つぐらいの機能があるだろうと私は思っております、一つはこの学力分布、2こぶの学力分布のAの子たちに対する塾の機能です。これはご存じの通り進学を目的とした機能を持つ、いわゆる「進学塾」と言われているものであります。

そして、もう一方に学力低位の子供たちがおりますが、このBの子供たちを中心にして構成されている塾がいわゆる補習機能を持った「補習塾」と言われているものであります。三つ目が、これが最近非常に大きな問題になって参りましたが、不登校の子供たちを中心とした不登校層を集めている塾です。つまり彼らに対して学習機会を保障しなければならないという問題を論じる機能であります。

そして、もう一つの機能が実はありますが、それを整理する前にこのわれわれが注目したのは、実は私どもの研究室でこの塾の問題を研究しております、注目しているのが何かと申しますと、この「できる層」と言われていた、この進学目的のAの層の子供たちの中に実は二層化・二極化が進行しているのじゃないだろうかという問題なんです。つまり、Aの中にも2つの山ができる。つまり、A a層と言われる、俗に「進学エリート」とでもいうような、子供たちと、そうでない、進学塾の中にいながら学力がややその子たちより落ちる子供たちがいるというところでございます。

ポイントは、塾で学校の成績が上がらなくても、長期間塾に居続けるこのA b層の子供たちがなぜいるのかという問題がまず一つ目のわれわれのポイント、研究の関心でした。「親が行け」と言っているのかということ、そうではないわけで、多くの子供たちは自分自身の意識として塾に行き続けることを選択しているわけですね。塾をやめるということに躊躇しているのにはどういった原因があるのかということ調べて参りました。

すると、面白い言質が取れましたのは、「塾に行っていない子と一緒にされるのは嫌だ」という傾向が強いということです。塾に行っていない子と一緒にされたくない。つまり学力が低位であるかどうかは別として、塾に行っていない子と自分たちは違うんだという意識を明確に持ちたいという意識が、どうやらA b層の子供たちを長期間塾にとどめる、そういうメカニズムがあるんだということが分かって参りました。

そして、先程申し上げました不登校の問題ですけれど

も、この問題につきましても、実は二つの不登校のタイプがある。つまり、いわゆるここにも二極化があるだろうというふうに考えております。要はこの背景に何があるのかということですが、不登校の子供たちが増えてきた一つの原因に、例えば今、教育政策の中で、高校の偏差値を序列化して、偏差値下位の高校からその学校を統廃合していくという傾向があります。これは先行研究の中にいろいろありますが、定時制高校や偏差値下位の公立高校をつぶしてしまっていく傾向がある。

そうすると、つぶされる対象になっている高校は、機能的に見ますと、不登校の子供たちの、いわゆる言葉はよくありませんが、「受け皿」のような機能を果たしているところがあったんですね。ところが、そのタイプの高校がどんどん整理統廃合されて参りますのでその子たちの行き場がなくなってしまった。その子たちの多くが塾へ、学習の機会を求めて来ているんだということです。これに、いわゆる「学習機会を保障する」という機能を付加させ三つ目の機能として定義します。

さて、四つ目なんですけれども、それは何かと申しますと、学校化する塾が出現してきたことであります。いわゆる塾と学校の機能が、お互いに住み分けがあまり明確でなくなってきた塾が出始めたということです。具体的な例ですが、京都にあります、私が住んでおります所の近くの塾のチラシをもらって参りました。大事な所をフレームアップしますが、この塾の「教育方針」という所をちょっとご覧いただくと、「広い視野、豊かな社会性」を子供たちに塾でつけるんだというわけですね。あるいは、「個性尊重の綿密な指導」をするんだという辺りの所であります。「個性」とか「社会性」という言葉はもっぱら塾にはこれまでなじみにくかった言葉だろうというふうに解釈しておりますが、このあたりを塾の方針として学生募集に使っている塾が出てきたということです。

調べますと、例えばインターネットを使った通信型の塾が現れてきたりとか、塾と言いながらも「遊び」や「生活体験」、あるいは「自然体験」や「社会体験」を前提とした塾が出てきたり、あるいは最近では京都でも家庭教師のチラシによく入っていますが、「体育を教えます」という家庭教師があつたりします。こうなってくると、もう塾と学校がほとんど切り分けられなくなっている部分が出始めたということです。これをいわゆる四つ目の機能として整理したいと思っております。

さて、次に塾の功罪を調べて、整理してみます。塾のメリットは何かというと、まず一つ目によく挙げられるのが、いわゆる折り重なる領域を確認することができる

ことです。つまり、旧学習指導要領の時に、それぞれの教科における領域は、折り重なって学習指導要領というのは編まれていた。ところが、これが新学習指導要領になりますと、全く大事なところだけ、つまり木の幹の部分の所だけで構成されておりますので、重なり合いを確認することができないカリキュラム構成になっている。つまり塾は指導要領の改定によって、そぎ落とされてしまった部分を補っているんだということが言われます。

二つ目は、塾に通っている子供たちは、塾の時間を前提にして生活のリズムを作っているという指摘があります。例えば、これは先ごろ発表されたものですが、「学校に行く前に朝食を取っているかどうか」と、学校での、例えばこの場合は中学校2年生の英語の学力なんです、その相関を取ったグラフであります。見るとわかります通り、「朝食を必ず取る」という子供の英語の学力が高いということがわかります。逆に「ほとんど取らない」子供たちほど、学力が落ちているという指摘ができます。

これはなぜかと言いますと、もちろん、例えば「朝、朝食を取ると脳に糖分が回って・・・」とかいう説明があるのかもわかりませんが、そうではなくて、これをいわゆる生活のリズムと置き換える。あるいは、例えば荻谷さんらの指摘によれば、「家庭的な影響が、学力やあるいは学習にいざなうモチベーションとなる」という研究がありますが、つまり、生活の習慣、家庭的な背景、リズムが実は子供たちの学力形成にいい影響を及ぼしているのだと解釈すれば、塾の時間に合わせて子供たちの生活リズムが構成されているということが成り立つわけですね。そうすると、生活のリズム作りに、塾は実は非常に役立っているという指摘もできるかもしれません。

更に、これは子供たちの所属集団の問題、つまりいじめなどの研究をしているとよく分かるんですけども、学校にしか子供の居場所がない子よりも、学校以外に、例えば塾も含めてですが、居場所がある子供たちのほうが、つまり、自分の所属集団をたくさん持っている子供のほうがいじめられない。あるいはいじめにあいにくいということが言われるのと同じで、いわゆる居場所として塾を求めている子供たちがいるんだということもメリットとして挙げられます。

反面、塾のデメリットは、先程申し上げました通り、塾に行っている子供たちの間の中にも、A、Bのように、いわゆる本当に進学を目的としている子供たちと、塾に行っているだけという子供たちがいるんだという、つまり二重構造を彼らの中に作ってしまったこと、これが一

つ目であります。これを、ちょっと最近、いい言葉がないかなと思って探したら、このロシアのマトリョーシカがよく似てるので、何かこれは使えるかなと思っていました。新しい造語を作るのが好きな人間が社会学にはいっぱいおりますので、(笑い)これをこれから使っていただければ。ついでに括弧して「原によれば」と書いておいていただいて、「マトリョーシカ構造」とでも言おうかなと思うんですけども。それから二つ目は、これは一般によく言われる受験偏重教育への結果としての加担がやはり塾にはあるということでございます。

実は、この発表をするにあたって、先程のマクドナルド先生がおっしゃってましたが、公文式がどうも随分注目されている。日本だけじゃなくて世界的に注目されているわけですので、いったい何がこれだけのシステムを拡大させていった背景にあるのかということを含めてのまに教えてもらいました。これは固有名詞を出してもいいと、担当者からも許可をもらっていますので、だいじょうぶだと思います。それを私なりに解釈をして五つのメリットとして書きました。

順は不同なんですけれども、一つ目は、「一人一人の学力が違って当たり前」という視点からスタートすることです。学校教育にはこの視点が随分薄いように思うわけですね。それから二つ目は、いわゆる「学力に対する関心が、得点よりも自分で学び取る力に置かれている」ということ。それは例えば、「子供の学習の面倒を見てやるのにすごくストレスを感じる」と言いますが、例えばこういうシステムだと勝手に自分で進んでいきます。そして進んでいきながら、結局だれにも教えてもらわなくても自らの学習力を高めていくという辺りが随分とこのシステムが受け入れられる要因であるということなのかと思います。

それから三つ目は学力のステップが、「分からない」ものを「分かる」ようにするというだけではなくて、「できる」という点に注目をし、更に、一番右なんですけれども、「すぐできる」という、時間の問題へ転換していくということです。つまり、下から二つ目ですが、学力を「点数」と「時間」の2要素で判断するという、つまり早く問題処理をするという辺りの所に力点が置かれているということでもあります。

それからもう一つメリットがあるとすれば、学習進度が非常に「スモールステップ」であること。ちょっとずつ進むことによって、子供たちは同じことを繰り返してのように感じながら先へ進んでいるということになるんです。

逆にデメリットは何かということもございますけれど

も、デメリットはいわゆる「なぜそうなるのかということを考える力を涵養する」という点に脆弱さがあるということです。補足をすれば、虫食い式で括弧を埋めていく作業というのは、子供たちの理解に基づいているというよりも、いわゆる解き方を覚えて解を導いているという感じなのかもしれません。したがって、ちょっと問題をひねられるとそれに対してたちまち対応できなくなってしまう。それから、早期教育や受験偏重の教育へ、結果として加担しているという問題も指摘されるところです。最後に、これが学校教育との一番の違いでしょうけれども、どういう人物を育てようとしているのか不明確であること。この点がデメリットだろうというふうに言われます。

子を持つ親として私のポイントを四つ指摘させていただきまして、私のプレゼンを終わらせていただきます。先程申し上げました通り、私も親の立場から塾を見ている部分も実はあります。こういう席ですので率直に申し上げますが、正直申し上げて公立学校に対する不信感というのはどうもぬぐえない部分があります。学校教育では必ずしも学力が保障されるとは思わない、思えないという親の本音がどこかに見え隠れ致します。いわゆる「小学校1年生の段階からそんなに差を付けられてしまったら、あとで取り返すのがきつい」という辺りのところがどうやら親の本音としてあります。

それから二つ目は、結局「塾には行かせないといけないだろうなあ」というのをみんな持ってるのではないのでしょうか。一部の親は別ですけども。あとは、「いつから行かせるのか」という問題と、「どんな塾に行かせるのか」というタイミングの問題。そして三つ目は、どういう言葉がいいのか分かりかねたので荒い言葉を使いましたが、いわゆる「抜け駆け志向」とでも言いましょうか、「自分の子供には勉強ができるようになってほしい」という親の願いがある。今のままではどうなってしまうかという、この二つ目、三つ目を合わせますと、いわゆる「アンテナの高い親」、あるいは「その子」のみがチャンスを得ることができるような構造になっていると言えるかもしれません。

つまり、言い方を変えれば、例えば「ただとにかく塾に行かせればいいんだ」というふう考えている親がいる一方で、「この塾でなければならない」とか、あるいは「学力や受験情報を得るには、この塾だ」というふうに特化して、もう1点狙いで行かせている親たちまでいるわけで、つまり、繰り返しますが、親のアンテナの高さによって子供にどういうチャンスを与えることができるのかは、随分塾の種類によっても変わって参ります。

そして、一番最後ですが、私が住まいします京都であるとか、あとで総括討論をしていただきます山内先生のお住まいになっている神戸などは、東京とよく似た傾向があるかも知れませんが、私学志向が実に強い地域であります。従って、公立と私立には随分と差があり、背景には、「私学はたくさんいろんなことを教えてくれる」というイメージがどうやら親にはございます。何も、いわゆるエリート志向でなくとも、みすみす公立学校に行かせてあとで苦労させるよりは、あとで自分の子供に苦労させるのは嫌だから、ちょっと、早くから私立に行かせて、といった感じなのかもしれません。この辺りの親の意識みたいなもの、あるいは本音みたいなものの後ろに、先程から申し上げてきた塾がダブっているというのが今の社会の構造ではないだろうか、というふうに思っております。

荻谷 ありがとうございます。こちらで当初予定した時間を10分ほどオーバーしてなんですが。もうこのまま、少し休み時間を減らして進めております。当初の予定ですと、45分再開だったのですが、もう、ちょうど3時再開にします。

(休憩)

荻谷 それではまもなく始めたいと思いますので、再度ご着席をお願い致します。こちらの進行の不手際もありまして、十分な時間を取って先生方にご発表いただけないんですが、このあとお二人の指定討論者の方から、多少短めをお願いしまして、そしてそのお二人のコメントが終わったあとで、今度はフロアの方含めて全体の討議に移りたいと思います。

それでは初めにコメンテーターとして、鹿毛先生をお願い致します。どうぞよろしくお願い致します。

鹿毛 皆さん、こんにちは。慶應義塾大学の鹿毛です。今日は、先生方のお話伺いまして、私なりに考えたことを最初に簡単に述べさせていただいて、各先生方に質問を投げ掛けてみたいと思います。

「今日指定討論をやれ」というふうに仰せつかってから、塾と学校の関係ってということがずっと頭の片隅にあった、自分の塾体験から「いったい塾って何なのかな」ということを振り返ってみますと、確かに学習塾に中学の時とか通ってましたね。高校の時とかは予備校には行かなかったんですけども、大学に入って、あるいは大学院の時とか、塾の講師とかあるいは経営者まがい

のことまでしていたんですよね。これらの経験も踏まえながら、改めてこのテーマについて考えて参りました。

問いのようなものが二つ浮かんでいます。一つは塾と学校っていうのは、同じなのか、違うのかっていうこと。もう一つは、塾的なものと学校的なものっていったい何だろうかっていうこと。この二つについて私なりの考え方を申し上げたうえで、先生方に質問のボールを投げてみたいと思います。

まず、これらのことを考えるにあたって、小宮山さんという方が岩波から「塾」という本を、岩波書店の「シリーズ教育の挑戦」という中の一冊として書かれています。塾って一言で言ってもいろんな塾があるんですよね。それを一括りにして「塾」とまとめてしまうっていうこと自体がちょっと無理があるんじゃないかと。その小宮山さんは、学習塾を進学塾、補習塾、総合塾、教育理念塾の四つに分類しているんですね。

塾というと主に進学塾のことばかり光が当たるようなんだけど、むしろ数としては補習塾みたいなのところは多いし、総合塾ってのは進学塾と補習塾を合わせたようなもので、むしろ個人的ではなくて会社経営というか、資本金のある規模の大きなものが総合塾だと位置づけられています。

教育理念塾っていうのは、今日の話題であまり出なかったんですけども、原先生が最後にちょっとお話しになったことと関連するかもしれません。塾長さんが理念を持って、それを実践するというかたちの塾です。私も間接的にかかわりがある塾が品川にありまして、そこはまさにそれでして。それこそ個性とか社会性って言葉は使わないかもしれないけども、それらのことを大切に、みんなで合宿をしてグループ活動をやっているんだけど、その中でいろんなドラマが起こるわけですよね。ドラマを通して、それをサポートしながら人間形成っていうんですかね、一言で言うと。そういうものをすごく大事にしていながら、補習塾もやるというね。このような理念を重視する塾があるわけです。塾といってもこのようにいろいろあるんだということをまず踏まえなければいけないということが一つですね。

ただし塾というのは、「経営」であるということ。これはやっぱり押さえておかなければいけないですね。あとでちょっと述べますけれども、サービス業的な意味合いがとても強いかなということです。要するに教育理念と経営理念とをどういうふうに折り合いを付けていくのかということが、塾では厳しく問われることになると思うんですね。多くの場合、教育理念塾を除き経営理念のところが優先されると、学校の学習を補完する補習、あ

るいは進学ということを目的として、勝ち抜くための受験知みたいなのを教え込むという消費者のニーズに応じた経営が優先されることに伴っていろんなことが起こってくるという点は確認しておく必要があると思います。

では、「塾的なもの」と「学校的なもの」とは何かという話をちょっとしたいと思うんですけども、塾的なものっていうのは、今日の先生方の話でも分かるんですけども、ある種の教育の内容とか方法というものが、非常に効率化するというか、教育心理学的に言いますと……。私は教育心理学者ですので、どちらかという子供との学習であるとか、発達であるっていうことから教育を見ていきます。ですので、こういうような塾とか学校的なものということを考察するときにもそのような視点から見ていくんですね。

ディープアプローチ、サーフィスアプローチという区別があります。ディープというのは深い学習、サーフィスというのは、要するに表面的なというか浅い学習という、学習の二つの区分がされています。浅い学習というのは、要するに機械的な記憶を中心として、ハウツーの知識をすぐに問題場面に適用する学び方であるのに対して、ディープアプローチというのは、もっと意味づけとか、もっと知りたいという好奇心であるとか、そういうものを基盤として理解が深まるようなアプローチのことです。

一般論ですけども、学習を深めていくという観点からするとディープアプローチが望ましいだろうということがいわれています。認知心理学的にいいですよ、理解とは、知識と知識が結びついてネットワークを広げていくということですから、「分かった」とか「できた」ということは、問いを発しながら、それを解決してプロセスの中でそのようなネットワークが豊かになることだということになります。10年ぐらい前に強調された新学力観モデルでいいですよ、要するに「考える力」であるとか「知識・理解」とか「意欲」とか「判断する力」とか、「自己評価能力」とかがすべて一体化したような学びが起こったとするならば、それはディープアプローチだと思います。

こういうふうに考えますと、塾的なものというのは、どちらかという表面的な浅い学習、これは佐伯胖先生が書かれてる予備校についての本の中で「受験勉強っていうのは、やり方主義である」というふうに断言されてるんですが。この「やり方主義」ということになると、とりあえずテストをクリアすればいいわけで、それ以上の勉強は無駄ということになるんですね、その

意味で効率重視になります。するとサーフィスアプローチのほうがよっぽどいいわけで。そのやり方を効率的に教えるということが主流になってくるのは必然だと思うんです。

このやり方主義の問題点として、跡見の藤澤伸介先生が「ごまかし勉強」という本を書かれてますけども、要するにその場しのぎの学力をつければいいわけで、そのような学習っていうのは無味乾燥で面白くないけども、とりあえずやんなきゃいけないと。そういうふうにな身についた学力というのは、いわゆる「学力の剥落現象」といいますけども、テストの当日だけ光り輝いていればいいわけですね。しかし、その学力の輝きはそもそもメッキですから剥がれ落ちてしまうわけです。浅いアプローチというのは、そういう弱点を持っているわけです。

例えば教育理念塾っていうのはいろいろなので、これを塾全体がそうだというふうに一般化はできませんけれども、それに対しまして、学校的なものというのは、恐らく理想的には、ディープアプローチみたいなものを目指しているということだけではなくて、これは先程ちらちらとどなたかおっしゃってましたけれども、特に佐藤先生がおっしゃってましたでしょうか。人間形成という側面を色濃く持っている。これはとりわけ日本の学校の場合、強いんじゃないかと思うんです。要するに学校は一種の生活の場でありまして、その生活を前提として固有名詞を持った一人一人の子供たちがいるわけです。そしてそこに固有名詞としての教師がいて、そこでの人間関係であるとか教師の子供の見取りであるとか、そのようなものを基盤とした実践として立ち上がってくるものが、理想論のない授業であるというようなイメージが持たれています。

要するに、学校の教師はただ教科を教えるプロではないんです。その背後には人間理解とか子供理解とかいうことが基盤としてあるから、授業と授業外の活動とを切り離すことができないんですね。ですから、学校的なものというのは、ある意味であいまいなんだけれども、子供たちを丸ごと学校生活の中で育てるという教育活動の一環として授業の一コマがあるというところをえ方をする。ここに私は学校的なものを感じます。

そうしますと、学校的なものと塾的なものというのは、学習のとらえ方と、その背後にある考え方で随分違うんじゃないか。「学校はサービス業か？」という問いを、私はとても大事な問いだと考えていますが、私自身の個人的な考えでは、そうじゃないと思ってるんです。ただ塾は、どうしても経営という観点もありますので、端的にいうとサービス業であるということになりますよね。

さっき原先生から、個性とか社会性とか学校の専売特許だったものを塾が掲げて宣伝するっていうことがあるというお話があったけれども、例えば今までは、学校はデパートのようなもので、個性も社会性も学力も、生活指導から部活動まで何から何まで、デパートのようなサービス業であるのに対して、塾は専門店のようなサービス業だったというところもえ方もあるかもしれないけれども、私はそういうところではなく、むしろサービス業かサービス業じゃないのかっていう問いがとても大事だろうと思います。

それはどういうことかということ、サービス業じゃない要素というのは、学校には「共に創っていく」という発想があるんじゃないか。それは例えば授業でいえば、教師と子供と一緒に創っていくんですね。あるいは学校と地域が共に創っていく学校であるという視点が入ると、実は「サービスする—される」という関係ではないんですね。これが非常にクリティカルな学校と塾の違いであるんじゃないかと思います。

ただ、塾と学校の同じところは何かっていったときに、教育理念塾に対して特に感じるんですけど、実は子供に成立する学びという観点からすると、学校であれ塾であれ、「よい学び」は存在するんじゃないかっていうのも事実だと思います。制度的な制約はいろいろあるけれども、要は授業の中で子供たちがその一授業をどういうふうに体験するかというところで、例えばディープアプローチが成立したりする瞬間っていうのは、塾であろうと学校であろうとありえるし、学校であっても多くの場合それが起こっていないわけですね。「学校が塾化してる場合もあれば」という話もありました。だから、それは塾か学校かという問いは、実は本質的じゃないということも分かってきます。

私なりのこの問題に対する整理を述べてきましたけど、余談でちょっと付け加えるならば、河合塾の丹羽さんと言う人が、「間違いだらけの大学入試」という面白い本を書かれているのですが、その本の後半で何が論じられてるかということ、河合塾の戦略として、例えばサテライト方式であるとかテクノロジーを導入して授業改善を図ってきた中で分かってきたことが二つあるというんですね。一つは、高校生の根元の学力が低下しているという事実。つまり根元の学力っていうのは、昔の公立進学校で培われてきたような、要するに学ぶ意義であるとか、学ぶ価値とかを、これまでは高校時代に何となく感じ取ってきて予備校に入ってきたから、予備校がやり方主義を押し通すことができたっていうんですね。ところが、そういうことが最近成立しなくなって困っている

というのが一つ。

もう一つは、このような根元の学力をつけさせなければ予備校が立ち行かないから、授業研究を始めたっていうんですね。そのためにはサテライト方式じゃ駄目で、学習者と教師が一緒の場を共有してこそ授業なんだっていうことが研究の結果分かったというんですね。これは、非常に本質的なことで、予備校だからとか学校だからっていう問題を越えて、実は「学ぶ本質って何なのかな」っていったときには、原理は一つなんじゃないかなって思ったりします。

さて、ここまで私なりの考え方を述べてきましたけども、これから質問のボールを投げていきたいと思います。まず、倉井先生。ご自身の塾経営の理念というんですか。恐らく先程の教育理念型ということは、非常に私は注目したい塾の在り方なんですけども、先生ご自身の言葉で、その理念についてここで主張していただきたいなと。ポイントを絞ってお伝えいただければと思います。

それから、佐藤先生。先生が最後におっしゃった「塾に頼らない学校作り」という言葉、非常に印象的でした。それはよく分かるし、私も学校の先生方と一緒に仕事することがとても多いので、ほとんどその通りと思って聞いてたんですけども。ただ、今日のこのシンポジウムのテーマである塾との関係というところで、もう一歩踏み込んだパートナーシップの可能性っていうんですかね。もしかしたら広い意味での人間形成を共にシェアしながら、塾とのパートナーシップを築くこともあり得るわけですが。

一方で原先生からご指摘あったように、「学校化する塾」っていうのも出てきている状況ですね。奇しくも今日は、「学校化する塾」と「塾化する学校」という二つが出てきましたけれども、塾が学校化してくる中で、どのような今後のパートナーシップを築いていけばいいのか。文科省のほうもかなりかじを切ったところでもありますし、学校がいつまでも「私たちこそ学校です」と言ってる時代ではないようにも思いますので、そのへんのご意見をもう少しお聞きしたいと思います。

さて、それから車先生については、先程の先生と同じなんですけど、上智学院のお話がなかなか聞けなかったと思うんですね。いわゆる公立学校と違うところで、特に先生は特殊な学校の必要性ということをかなり強調されたと思うので上智学院の教育理念をもう少しお話しただけならと思います。

それから、マクドナルド先生のお話も非常に興味深かったんですけど、「アメリカには塾がない」と言いながら、実は「塾的なもの」っていうのはあるんだっていうの

が分かったんですね。それは、例えば私もアメリカに2年ぐらいいたのでよく分かるんですが、例えば、ある小学校の先生が「標準化テストに反対。なぜかという、私は標準化テストの訓練する仕事をしてるわけじゃない。だけどもしなきゃいけない。それを私は授業と呼びたくない」と言うんです。彼女が言っていました。

つまり、実はディープ、深い学習を期待してるのにもかかわらず、浅い学習をせざるを得ないっていうジレンマに陥ってる場所であるとか、あるいはサマースクールであるとか、サマーキャンプなんかも実は教育理念的な塾といえば塾なわけで。一番分かりやすいのは、SATの受験コースですけど、それは進学塾に近いのかもしれませんが。ですから、塾という形態、そういうようにひとくくりはされないけれども、「塾的なもの」っていうのはあるんじゃないかなというふうに思うんですね。

ですから、アメリカの「塾的なもの」っていうのをちょっと語っていただきたいということなんですが、それじゃちょっと漠然としてるかもしれないので、公文がなぜ人気なのかなっていう辺りですね。私は公文っていうのは、さっき改めて確認したのですが、あれはプログラム学習の原理以外に何があるんだろうというふうにも思うわけで。プログラム学習は、だからいいんですよね。ある非常に特殊な領域に対する非常に効率的な学習だし、確かに学習意欲をそれで育てることもあるでしょうから、私は否定するつもりは全くありませんけれども、ただ、プログラム学習の限界だってあるわけですから。そのあたりをとりわけ公文がなぜ人気なのかというのを、ぜひアメリカ人の先生の口から、語っていただければというふうに思います。

最後に原先生ですけれども、先生の親としての本音というところを、非常に興味深く伺ったんですけども、私も同じく小学校の娘がいる身なんですけれども、先程のサービス業ということに関して、私はどちらかというとやっぱり学校の先生たちと仕事することが多くて、そっち寄りの人間関係が多いからかもしれないんですが、公立学校の肩を持ってしまいがちで、公立の先生たちに優れた先生たちたくさんいらっしゃることをよく知ってるので、意外と信頼してたりもするんですね。

学校がサービス業かどうかという大きな問いについて、何かコメントをぜひ。私は教育心理学者ですけども、先生は社会学者のお立場ということなので、同業といえば同業なんだけど、ちょっとスタンスの違うところで、先生の本音と絡めながら、ぜひ語っていただけたらと思います。すみません、ちょっと、かなり長くなりました。

荻谷 秋田さんの予言通り。(笑い) それでは続いて山内先生にコメントをお願いします。

山内 神戸大学の山内でございます。早く終わったほうがよろしいようですので、要領よくやっていきたいと思っています。

40年ぐらい前の統計を見ますと、首都圏で大体10人に7人ぐらいの子供が、何らかのかたちで塾に行っていたというデータが残っております。関西圏でも似たような傾向だったと思います。私が子どもだったころといいますと、「未塾児」というような言葉がありまして、塾に行っていない子どもは、「未塾児、未塾児」と呼ばれていました。いじめられるというわけではありませんが、もうすでに塾に行っていない子どもが珍しくなっていた環境だったわけです。

私個人の経歴を振り返りますと、幼稚園と小学校は公立で、中・高は先程原先生のお話にもございましたが、私立の6年一貫校で、大学と大学院は国立でございます。しかもずっと関西圏で住んでおりましたので、それ以外の地域のことはよく分かりません。ただ、私がゼミで塾の問題などを議論しますと、山陰とか北陸とかから来た学生は、「私の住んでいた町には、塾とかありませんでした。だから、そういう選択肢はあり得ませんでした」ということを言う学生がよくおります。

ですから、さっき佐藤先生が「学校の塾化」ということをおっしゃいまして、原先生は「塾の学校化」と逆のことをおっしゃったわけですが、塾と学校とがお互いの存在を前提として、あるいはお互いがあるものとして、これから存在していく以外の選択肢はないというのは都市部での話ではないかと考えます。従来のように、塾が本来の学校教育の在り方をゆがめるとか、あるいは学校はきれいな建前ばかりいってしっかり学力をつけないとか、そういう対立の構造からお互いに何か前提として、あるものとして成り立っているように見えるのは、首都圏や関西圏、中京圏の話であります。塾の存在は、地域分布上、非常に偏っているというイメージを持っております。この地域間格差をいったいどうするのか（あるいは何もする必要はないのか）ということが、非常に気になりました。

それから、これも佐藤先生からご指摘のあったことですが、階層という問題は、やはり塾について考えるときに見落とすことのできない要因であると考えます。社会学者というのは、私も教育社会学を専攻しておりますけれども、何かといえば社会階層、社会階層と言って、教

育学の人々に眉をひそめられる機会が多いわけですが、この問題はどうしても看過できないと考えます。

と申しますのは、大阪市や大阪府の学力調査をみますと、いろいろな要因を考慮して、子供たちの学力を回帰分析に掛けて説明しているのですが、一番規定力の大きい要因は、ただ単に「塾に行っているか行っていないか」という要因ではなくて、「週当たり何日塾に行っているか」という要因でした。週4日塾に行っている子供、3日行っている子供、2日行っている子供、1日だけ行っている子供、全く行っていない子供と、この順に学力がリニアに下がっていくというわけです。

そうだとすると、当然週当たりの塾に行く日数が多い子供は、塾に行く費用も当然かかるわけございまして、それはまさに家庭の経済力の問題になってくるというわけございまして。ですから、階層という問題をどう考えるかということは看過できません。原先生も少しお触れになっておりましたが、触れさせていただきます。

最後に私のほうから申し上げたいのは、関西圏の話でございます。関西では長い間、有名大学に進学しようと考える子供には、二つのルートがありました。一つは私立6年一貫校に公立小学校から入って、中学受験を経て、高校受験なしで有名大学を目指すというコースです。先程原先生のお話にもございましたように、京都と神戸で私学志向は大変強いように思います。ただし、大阪や神戸では、非常に公立学校の足腰がしっかりしております。例えば、東京大学ですと2004年度の合格者数の多い上位20校は、私立17、国立3でございますが、京都大学の場合には、私立12、公立7、国立1です。それから大阪大学は、公立11、私立9です。公立が非常にしっかりしております。特に大阪は非常にしっかりしています。

ですから公立学校に行き、1年生からあるいは2年生の後半ぐらいクラブをやめるころから、予備校の専科に行くとか、あるいは塾に行くというかたちで有名大学を目指すというコースもあったわけです。ところが、最近どんどん塾に行く年齢が低年齢化し、多様化し、長期化している。私立に行った子供は、学校でもう十分なことをやっているから塾に行かないというのがこれまでのパターンだったわけですが、最近は私立に行ってもずっと塾に行っているようです。小学校の時からずっと塾に行っているわけですね。大学に入ったら大学に入ったで、またダブルスクールをやっております。非常に長いお付き合いになっています。

他方、公立の人たちは中学校を受験するわけではないのに、もう小学校の低学年からずっと塾に行っております。さらに、その傾向に拍車を掛けるだろうと予測され

るのが、同志社ですとか立命館の小学校設置です。それに関西大学、関西学院大学といった大学が追随するということもほとんど決まっております。この4大学が動きますと、その流れに続こうとする大学も当然出てくるわけです。ですから、関西では、塾ですとか、お稽古事ですとかの多様化、低年齢化、長期化という傾向は、ますます進むだろうと考えます。

今日お話のあった中で、一つ時間の関係で恐らく省略されたのだと思いますが、関西における場合、お稽古事が非常に重要です。お稽古事は、塾とは別のものということではございません。低年齢化するに従ってどんな塾でもお稽古事的な要素が入ってきますし、それから人間形成的な要素も強まってくるわけです。「就塾前教育」というかたちで、お稽古事が、公文式でもそうですけれども、関西で非常に受け入れられていると考えます。

また、公立の小学校で、入るなり一年生から学級崩壊というような学校も少なくありませんから、そういった学校に通わせている親は、学校の教育には期待できず、したがって塾で補うという以外に選択肢はないわけです。学習する習慣を身につけるとか、学習する姿勢を身につけるといふ目的も持って塾に行かせるということになるのです。要するに、先程原先生が不登校の児童に関しておっしゃった「学習機会の保障」というようなことにもつながっているとみております。随分はしりましたけれども、これで終わらせていただきます。

苅谷 どうもありがとうございました。それでこれから議論に入りますが、皆様からご質問を受ける前に、今鹿毛先生のほうから、それぞれの前半の発表者のお一人お一人に質問が出ていましたので、そして今の山内先生のコメントも踏まえまして、まず簡単にそれぞれ前半の登壇者の方に、手短にまずリブライをしていただいて、そのあとで今度フロアとのディスカッションに移りたいと思います。なるべく短い時間でよろしくお願い致します。

倉井 先程の河合のサテライトの授業のお話ですが、名古屋にあります、私立の中・高・大学の付属高校でサテライトの授業をやるということになったんです。たまたまうちの塾生もその高校へ行かしまして、「先生、塾へ来なくてもよくなった」と。それはなぜかという、河合でサテライトというのを始めたということで、それから満員御礼状態だというふうで、「僕もしばらくしたらやめますよ」という話だったんです。ところがふたを開けてみたら、実際続いたのは1カ月もたなくて、20日ぐらいで、あと閑古鳥状態ということでだれも来なくなっ

てしまって、もう大失敗だというのがありましたから、この丹羽先生のおっしゃられるのは、僕は正解だと思うんです。この点に関しましては。

それから、私の塾が何を目指すのかということ、こういうご質問だったと思うんですが、今の決して、サーフィス学習とディープ学習、これでよろしいですか。僕はどちらを採るかといえば、やっぱりディープなほうでしょうね。このディープだといっても一つ前提条件がありまして、基礎部分を徹底的にまず固めると。固めなくてはディープな方向へは進めませんので、僕はまず基礎部分は固めます。今筆記体を教える塾というのは、今は皆目状態です。うちでは高校から入ってくる人たちが、非常にご苦労だと思うんですが、一応筆記体も覚えていただくと。そこから始めます。

それで僕はこういう方向に行ったほうがいいのかと思っただけで、ある本によります。マックス・ウェーバーの「職業としての学問」という本の中に「写本の文字の解釈をこのままにしておいてよいのか」という状態にずっとこだわり続けると、三昧の境地に入ると、あるときに靈感がわく」と。何という面白いこと言っているだろうと感激しました。

それから、僕自身がかなり落ちこぼれたという経験がありますので、自分がそこから立ち直る時にどんな学習法をしたかという、今の学校の進度に合わせるのをやめて、良い辞書、参考書を先生にお聞きして、それからです。それから何とか立ち直ることができましたし、現在でも、ぼくはどちらかというと英語専門なんです、その専門の部分については、かなり実際に教科書とかそういうものには表れてない部分で、「こういうふうに解釈できるんじゃないか」と、そういうところもかなりの部分で教えることができるようになりました。

それで、ほかの塾から替えられてうちへ来る子供さんの中には、最初に大きな拒否を起こす場合があります。それはなぜかといいますと、「人称代名詞、もう前回のテストで終わったんじゃないか」と。終わったやつを僕はまた1週間ぐらいたってからやるんですよ。「だから私はあの時に合格したんだ。もうできる。もうやらなくていい」と言うのがけっこう多い。でももう一度やっていただきます。そういうことをやりますと、例えば3のものが10にはならないけれども、かつて3だったものが5になるという、次に7になり、さらに次に10になるという、こういうことは十分にあり得ると。それをマスターした段階で、今度は深い部分に入っていくというやり方が一番いいのであろうし、生涯学習につながるこれ以外の方法はないと思っています。

それから、学習習慣なんかは、塾によって左右されるのではなくて、生活習慣の正しい子供さんが塾へ入ってきたりすると、やっぱり伸びます。ところが、生活習慣が悪くて、朝はなかなか起きられない、夜更かし。それからゲームをやり続けると。こういう子供さんが入ってきててもなかなか伸びませんので、家庭での生活習慣が非常に大切だと思います。

社会階層の問題でいっても、例えば僕は学生の時アルバイトで個人指導したことがあるんですが、名古屋でいうと東区白壁町と言う所で、徳川時代には名古屋城へ勤めているいわゆる重職の方々が住んでいました。それとかあとは主税町（カコマチ）という地区も親からずっと引き継いでという所なんです、彼らには彼らなりの厳しさがあると思います。それは時代を経た厳しさであって、たまたま運良くなったものではないので、家庭としてのそういう理念がちゃんとできあがってます。だから何のために学習するのかということを、説明する必要はないんです。最初から受け入れ態勢十分であるし、予習まで済ませてありました。ところがそうではない家庭で、つい最近かなりのお金を得られて、豪華な生活をしておられるという家庭の子供さんの場合は、生活習慣の改善からやらないと全く駄目だなというのはありました。以上です。よろしいですか。

佐藤 私のほうは、塾に頼らない学校ということで質問されたわけですが、最初にお話をしたように、私の気持ちの中には、塾がいいとか悪いとかいうことはどうでもいいという考え方がありますので、塾ということを前提に学校経営をしてきてこなかったということです。学校というのは、塾は塾として存在してもいいと思います。だけでも学校としてやるべきことはきちっとやっていくという考え方をもっているわけです。塾は存在するわけですから、今パートナーシップの話をされましたけど、学校でやるべきことと塾でやるべきこと。補習塾はあっていいなと思っております。学校の中で、本当はこの子にもっと時間をかけてあげたいとは思っているけど、なかなか時間が取れない。そのために補習塾で補ってもらえると思います。

実は塾の経営者と自分が小学校校長の時に話し合いをしたことがあります。地域の学習塾が半分来てくれましたが、進学塾という所は、まずほとんど来ません。低学力層の子とか近所の子どもたちが行くような所は、学校の考え方と似てるわけですね。そういうかたちのものもパートナーシップっていうんでしょうかね、「この子は学校でこうなんだけど」と、お互いが分かり合えると

いうことがあります。

「もし、こういうことができたなら」と今ふと思ったのは、やはり学校の先生方は大変忙しい。多忙なんですね。授業やるのに教材の、自作、カリキュラム開発ということです。これ、非常に時間がかかるわけです。塾の先生のほうが、そういう点では教えることだけに専念できる。学校はそれ以外のこと、生活指導、部活動指導等やっておりますから、なかなか取れない。だとすれば、いい教材開発をしてくれたものをいただけるというような、ちょっと何か身勝手ですけれども、そういうものをいただけると。

私は実は本屋さんへ行くと必ず予備校の、有名〇〇講師とかありますね、その先生がどんな教材でどういうふうにされているのか、必ず見てくるんです。そうするとやっぱり教材なんだなということは分かります。学校の先生方は、午前中授業があって午後空いているというようなことあれば、教材開発の時間に充てられるわけです。できればカリキュラム開発したものをいただけるというようなシステムがあるといいと思います。学校で与えるものは少ないかもしれませんが、お互いにいいものは交換したいと思っています。

車 まず上智学院っていうのは、特殊な目的を持った塾であることを申し上げたいと思います。私たちの塾に通う子供たちは、毎日特殊な環境に置かれていて、子供たちの環境が日本への企業の駐在員だとか在日韓国人っていう、そういう特殊な環境の子供たちが多いです。そして、その子供たちが通う学校というのは、日本の現地校と、あと韓国人学校、そしてインターナショナルスクールの三つの学校に通う子供たちが来ています。このようないろんなさまざまな状況を背負っている子供たちなので、成績やそういう部分においても、千差万別、すごくさまざまな子供たちがいます。このような適応問題などを、さまざまな問題を抱えている子供たちへのケアが、学校だけでは十分ではなく、私たちの塾でそのような部分のケアもしています。

あと、そうですね。まず在日韓国人の場合、母国の知識が足りないわけで、そのような部分で教えてる部分が多くて、駐在員の子供の場合は、また韓国のように戻って、勉強したり受験されたりする子供たちなので、そのような部分でのサポートをしております。このような子供たちへの個別なそのニーズを、学校側から提供されることを期待することは難しいので、そのような役割を私たちどもがしております。

塾の教育理念なんですけれども、私は知識よりは子供

たちが知恵を持つことを願っております。子供ってというのは、子供らしさが大事であると考えております。子供一人一人の潜在力と、また理念を持つようにしてあげるのが大事だと思っております。子供たちが正直であることを願っています。特に日本で生活している子供たちなので、日本の誠実さを学ぶことを願っています。韓国にやがて戻っていく子供たちにも、これらを学んでほしいと思っています。そして、一つのものごとをさまざまな角度から見るができる融通性を持つことを願っています。小さいものでも敏感にとらえることをできる子供に育てたいと思っております。東京大学で、塾との関係を考えるこのような機会をとともうれしく思っております。以上です。

マクドナルド 三つの疑問や質問を聞かれたんですけれども、まずは、学力試験です。3年生から始まりますが、やっぱり全然今まではなかったことなから、嫌われるのが当たり前です。けっこう緊張したり、子供の学力を高めないといけないから、自由がなくなったり、ゆとりの反対側に行ってしまう、その傾向が出てきたから、アメリカの先生方、今けっこう混乱しております。

二番目の質問で、サマースクールとかサマーキャンプということが塾みたいなのです。それはその通りと思います。だから進学的ではなくて、補習的な塾ということ言えると思います。

三つ目は、何で公文が人気かということ。効果的です。実は特に数学の場合、やっぱり弱い所があると思うんですけど、OECDの世界的な学力テストがアメリカも落ちてしまうところがあると思うので、やっぱり親が数学的な学力を高めないといけないと思い、そういう公文みたいな塾に行かせることになっております。

原 ご質問は、私が最後のところで公立学校に対する不信感をお話し申し上げましたが、それに対して公立学校もいい所はないかというお尋ねなのだろうと思うのですが。時間の関係であまりゆっくりしゃべれませんでした。もう少し本音のところで申し上げますと、公立学校にももちろんいい学校はあるんですね。京都にもいわゆる「いい学校」と言われる小学校、中学校があるわけです。ところが校区っていうのがやっぱりございますので、その校区に自分が居住していなければ、もちろん通えないわけです。京都にも、よく新聞やニュース、テレビなどでも取り上げられる学校がございしますが、その学校の校区にわざわざマンションを買って、そこへ親子が移り住んでという、そういうことをやるのは一般的なんです

ね。「そこまでしなくても、私学へ行けばいいじゃない」っていうのが正確なところなんだろうと思っております。

荻谷先生たちがお書きになった『学力の社会学』という本の中の最後の所で、大阪大学の志水先生がお書きになっていたいわゆる「効果のある学校論」というのは、ぼくが非常に面白いなと思っているところです。つまり、「効果のある学校」というのは、やり方しだいで学校も学力低下は避けられるんだというところで、公立の学校の中にいくつか教育のやり方を工夫、改善することによって、教育効果を上げている学校があるんだということ指摘されています。

先程来申し上げてる京都のその公立学校がそうであるように、問題は何かというと、教育にかかわる者の、つまり教師たちのレディネスの問題と、もう一つは経験の問題だろうというふうに思うんですね。つまり、いい学校の先生方というのは、子供たちを教えるという、あるいはものを教える以外の部分含めてなんですが、非常にレディネスが高い。教師集団としてのまとまりも強い。更にもう一つ申し上げるのは、経験が非常に豊富であるということなのかもしれません。その点からすれば、いくつかの学習塾の中に、そうしたいわゆるレディネス、あるいは経験というものを潤沢にお持ちの塾があれば、当然その教育効果は十分に上がっているわけです。

先程休憩時間に、何代にもわたって塾を経営されていらっしゃる方とお話をさせていただきました。子供たちも随分と代わる代わるその塾に、おじいちゃんの子供がやって来て、そのお父さんの子供がまたやって来てっていう塾があるっていう話です。それは、やはりそういった意味での、いわゆる「効果のある学校」と同じ発想の「効果のある塾」なのだろうと思っています。

ですから、ポイントはすべての子供たちに、その子供のニーズに合わせたというか、ニーズに応じたというか、そういった確かな学力を保障していくことができれば、公立学校は、必ずしも僕が先程申し上げたように不信感の塊ではないということであります。その効果を上げている学校も一部あることは事実です。ただ、その学校に入れるためには、どうしても校区という問題があって、それを越えなければならないという部分を私学がうまくカバーしているというあたりが実態だろうというふうに思っております。

(この後全体討論にはいりますが、掲載は省略させていただきます。)